

第7回一関市総合教育会議 議事録

- 1 会議名 第7回一関市総合教育会議
- 2 開催日時 平成30年6月29日(金) 午後1時30分から午後3時15分まで
- 3 開催場所 一関市立千厩小学校
- 4 出席者
 - (1) 構成員
勝部修市長、小菅正晴教育長、千葉和夫教育委員、小野寺眞澄教育委員、佐藤一伯教育委員、伊藤一志教育委員
 - (2) 事務局等
市長公室長、政策企画課長、政策企画課主幹、政策企画課政策企画係長、教育部長、一関図書館長、教育部次長兼学校教育課長、教育部次長兼文化財課長兼骨寺荘園室長、一関市博物館次長、教育総務課長、教育総務課長補佐兼庶務係長
- 5 議題
人口減少社会における学校教育・地域の教育について
- 6 公開、非公開の別 公開
- 7 傍聴者の数 報道 3社
- 8 挨拶
市長挨拶

本日は第7回の総合教育会議であり、今回のテーマは、「人口減少社会における学校教育・地域の教育について」ということですが、関連付けたテーマで幅広く課題をとらえたほうがよいということで、これからの教育のあり方・方向性についてという大きなテーマの中、前回は「グローバル化に対応した教育環境の整備」というテーマで懇談をしたところです。今回は、子ども達が将来地元に着定するためにどのような取組がなされているか、共通の理解をする必要があると考えています。小学校の入学式を見ると、年々児童数が減ってきているのを感じますが、そういう機会がなければ一般の方々には人口減少を実感する機会がありません。そのような方々に実感を持ってもらい、いかに施策を打ち出していくかが行政の課題です。子ども達が地域という意識をしっかりと持ち、自分の育った地域を愛し、一旦外に出てもまた帰って来て、ふるさとを支えていこうというのが理想であり、そのための取組について地域の総力をあげていかなければならないと思います。本日は、きたんのない意見を出し合っただけでも次につながるようにしたいと思います。

人口減少社会における学校教育・地域の教育について（進行：教育長）

教育長 今回は、「人口減少社会における学校教育・地域の教育について」という大きなテーマですが、国際化やILCの関係、地域社会における考えなどの分野に波及させながら話を進めていくこととします。初めに市の人口及び学校の児童数の減少について説明し、その後、千厩小学校の先生から地域との関わりでの取組の発表をします。

政策企画課長：資料「一関市人口ビジョンの概要」により説明

教育総務課長：資料「児童・生徒数の推移」により説明

千厩小学校教諭（2名）：旧千厩小学校及び旧奥玉小学校の地元学習の取組について事例発表

教育長　今までの説明と事例発表について、また、人口減少に関して普段思っていることについてお話をいただきます。市内小中学生の平成17年からの13年間の年平均減少数は248人で、大きな課題です。そのような中、先ほどの事例発表では、自分たちが千厩の宝であると子ども達が学習発表をまとめたとのことですが、本当にそのとおりです。学校のカリキュラムの関係で時間がなかなか生み出せないのですが、学校の中だけでなく外で学習するということが大きいと思います。まち探検や地元学で地域の人と話をしながら足を運んだというのは、忘れられない思い出になると思います。

小野寺員　将来の地元定着を考えると、一旦外に出てもいつか一関に戻りたいという気持ちにさせるということで、地元のよいところ、歴史や先人、文化財、郷土芸能、食文化など、一関にいればこそやれるという思いを子ども達の心に刻み込むよう、小さな頃からそのような環境に置くことがよいと思います。また、先生方に友達づくりをまとめていただくと、友達とここで何かをしたいという気持ちになるのではないかと思います。

千葉委員　千厩小学校の事例発表を聞いて、職業についての理解が高まり、自分たちが宝物であるという認識を持ち、素晴らしいと思いました。地域への関心の高まりや自分たちのまちを大切にしようという意識を高め、将来ここに帰ってきたいという気持ちを持たせるための取組ですが、学校だけではどうすることもできない事もあります。進学や就職のために地元を離れ、戻ってくるのに働き先が十分とは言えず、どこで働いて生計を立てればよいのかということになると厳しい状況になってしまいます。一方で、若者たちが地元に戻り工夫しながら企業を立ち上げる事例がありますので、市が支援をして成功まで持っていけたら、続く若者が出てくるのではないかと思います。

佐藤委員　事例発表について、地域を支え、ふるさとへの愛着を強く持つてもらうための重要な取組であると感じました。冬季五輪で活躍した岩淵麗楽選手が、遠征で勉強が大変ではないかとマスコミに聞かれたところ、中学校の時に宿題がたくさん出されていたので慣れましたと答えていました。市内に競技の練習環境があるわけではありませんが、地元への愛着を持ち、学習にも一生懸命取り組んでいたことで、当市の教育環境は競技をしている方にも良い思い出になっていたようです。教育に最適な場所に3回引越をしたという「孟母三遷の教え」という言葉が中国にあり、人を育てるためには、環境を整えることが必要ということです。人口減少、若年層の流出にどう取り組んでいくかを改めて感じたところです。

伊藤委員　事例発表について、キャリア教育、中学校では社会体験学習、高校ではインターンシップに繋がっていくものであると思います。私が住む地域では、過疎化が進み、子どもがほとんどおらず、将来の不安でいっぱいです。学校の統合が止まらない状況で、質の高い学校教育を提供できるかが課題となっています。教育環境の変化、教職員が安定した指導力を発揮できるかも、大きな課題となってくる

と思います。千厩地域は学校に対する協力を惜しまずにしてくれているので、今後も続けていってほしいですし、開かれた学校づくりに邁進してほしいと思います。

市長 インターンシップは企業の負担が大きいですが、事例発表のあった学習方法は、完全なインターンシップではなくちょうどよい感じであると思いました。仕事に従事せず、働いている人を間近で観察し、時々説明を聞く「ジョブシャドー」という方法があります。事例発表のあった学習は、インターンシップとジョブシャドーの中間かなと思います。進学等を機に一関から出て、戻ってくる際に働く場が少ないという状況がありますが、各市がそれぞれの企業誘致のやり方で雇用を創出してきて、一関では、今、海外の生産拠点や労働の集約化に対抗しきれずに苦しい状況にあります。昔と比べると今の製造業の工場は人手がらず、工場誘致に頼るのは難しい状況です。人口減少のスピードを緩めるための取組をしていかなければなりません。子育て支援については、当市はトップクラスで、市の特色でもあります。一関で子どもを産み育て、その子ども達が地域経済を支えるようになるまでに時間がかかり、すぐに効果が出るわけではありませんが、粘り強く子育て支援や外部からの移住や定住を進め、また、日常生活圏のエリアとして周辺市町と連携していくことが必要です。地元学については、子ども達に調査をしてもらうのがよいと思います。ILCを機に、子ども達に英語での案内板の作成をしてもらうなどすれば、生きた学習になると思います。

教育長 子ども達が地元に戻りたいと思うものが必要ではないかとの意見が出ましたが、皆さんのお考えをお話しいただきたいと思います。市内に就職口が無いわけではないのですが、給料やネームバリューを考えてなかなか戻って来られないという現状があります。給料を重視するのか自分の住み心地を重視するのか、価値観が変わってきており、地元で生活することの価値をもっと強く打ち出すことが必要で、それができるのは教育や家庭ではないかと思っています。

佐藤委員 自然、歴史、文化、家族に囲まれた田舎の良さを見いだせるように、家庭や学校で地元学が継続的に行われる必要があります。統合前の学校で行っていた地元学が継続できるような環境づくり、また、学校運営に地元の方々が入って支援していただくことが必要だと思います。

市長 地元学については、大東の内野小学校が大原小学校と統合になりましたが、地元と連携したふるさと学習が引き継がれて行われています。子ども達に経験してもらい理解してもらおうとする大人たちの思いがうまく伝わっているのだと思います。そのような例は他にもあるのではないかと思います。

教育長 地域が積極的に関わってできるようになった例です。

伊藤委員 私の周りのUターン者を見ると、都会の生活に疲れ地元の温もりに癒されるために戻って来たケースが多いです。学校教育だけでなく、地元が高い意識を持って地元学やまちづくりを進めていかなければならないと感じています。

千葉委員 若者たちがUターンして帰ってきて、一関市でどのような活動をしているかということについて、御子息の例を小野寺委員からお話しいただきたいと思います。

小野寺委員 まちを盛り上げようという思いから、仲間同士で企業を立ち上げたようです。

仲間を作り一致団結するということを学校で学び、高校卒業後にほとんどが一関の外に出ましたが、戻ってきてそれぞれの経験を活かしていこうとしています。このような若者の活動を周りが支援し、若者に地元で自分が何ができるのかを考え、意欲を持ってもらうことが大切です。

教育長 少子化により、子ども達をお客様にしてしまうケースがあったかもしれないと感じました。先日のキャリア教育シンポジウムにおいて、子ども達に地域の問題を自分たちの問題として考えさせた方がよいという意見がありました。市内には各地域に元気なお年寄りから若者までいますが、そういった元気を子ども達に伝える場面がもっとあってもよいのではないかと思います。

伊藤委員 キャリア教育については、児童・生徒の実態も考慮に入れなければならないと思います。核家族化で家庭での子どもの担う役割についての調査があったのですが、日頃ほとんど手伝いをしていないため、勤労観が身に付いていないようです。また、お金に関する価値観等も身に付いていないようで、頑張って仕事をして生活が成り立っているのだという実感がなく、大きな課題であり、キャリア教育は欠かせないと思います。中学生の職場体験学習は、受入れに係る企業の負担や送迎に係る家庭の負担が課題となっているところですが、成果として、職業観についての新しい価値観を見いだしたり、金銭の価値を知ったり、地元愛が高まったり、大人との接し方や礼儀が身に付くという成果がありました。

教育長 家庭での手伝いについては、先日、まちづくり推進部の「結婚力の育て方」というセミナーがありましたが、講演で、小さい頃から家事を手伝う男の子は、結婚する割合が高いというお話がありました。家事を手伝い人に喜んでもらうという肯定的な印象を持ち、また、家事を通して人との関わりもできてくるとのことです。

市長 子ども達の金銭感覚の教育については、青年会議所による事業があり、市内全域に広げていければと思います。また、一関の若者が動き出したというお話は、私も実感しています。今までにない動きがここに来て出てきています。錦町のど市も今年変わりました。夏祭りも若干変わり、今年はさらに変わる予定です。若い世代の提案にあまり口を挟まないで、まず実行することを見守るのが必要で、子ども達がやがて成人を迎え地域社会の一員として動き出した時に、自分たちの意見も受け入れられると思ってもらえるような社会を作っていくべきであろうと思います。地域協働体を中心となって、大いにやっていただきたいと思います。

教育長 次回は、地域との関わりについてさらに議論していきたいと思います。本日はありがとうございました。

授業見学（6年生）

9 担当課

市長公室政策企画課